



Title	『ハリセーナチャリウ』1.1-5 校訂と翻訳
Author(s)	山畑, 倫志
Citation	インド哲学仏教学論集, 2, 23-45
Issue Date	2014-10-31
DOI	10.14943/hjiphb.2.23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/62133
Type	bulletin (article)
File Information	02_02_yamahata.pdf



[Instructions for use](#)

『ハリセーナチャリウ』1.1-5校訂と翻訳

山 畑 倫 志

はじめに

本テキストは著者が2005年に修士論文として提出した校訂テキストが元となっている。その後2006年にはSnehlata Jainが同じ写本に基づいて校訂を行いヒンディー語へと翻訳している。本稿ではその成果も参考にしながら、新たに韻律の整合性を考慮し、より妥当な校訂テキストの作成と日本語訳を試みた。

ジャイナ教の行伝説話

ジャイナ教の伝説にある六十三偉人の行跡を記した行伝説話はジャイナ教説話の中核を占める。ジャイナ教では行伝説話のことをサンスクリット語でチャリトラもしくはチャリタ (caritra/carita)、プラーナ (purāṇa) と呼ぶ。プラークリット語ではチャリヤ (cariya)、アパブランシャ語ではチャリウ (cariu) などの名称が用いられる。これら行伝説話はその型はほぼ同様であるが、その中に多数の説話が挿入され多彩さを生み出している。

六十三偉人

六十三偉人とは二十四人の祖師、十二人の転輪聖王、九人のバラデーヴァ、九人のヴァースデーヴァ、九人のプラティヴァースデーヴァのことをいう。ほぼ伝説上の人物であるが、それぞれが歴史的な順序にのっとして並べられている。その中にはラーマなどヒンドゥーの説話に見られる人物も組み込まれているため、インドの説話伝承におけるジャイナ教の役割を探る上で重要である。

祖師

祖師 (Tirthaṅkara) は過去、現在、未来の三つの時間区分、バラタ・クシェートラ、ハイマヴァタ・クシェートラなどの十の地域にそれぞれ二十四人ずつ存在するとされている。すなわち合計で七百二十人の祖師がいることになるが、具体的にその行跡が記されるのは現在のバラタ・クシェートラの二十四人だけである。

その二十四祖師の名を以下に挙げる。

1. リシャバ (Rṣabha)、2. アジタ (Ajita)、3. サンバヴァ (Sambhava)、4. アピナンダナ abhinandana)、5. スマティ (Sumati)、6. パドマブラバ (Padmaprabha)、7. スパールシュヴァ (Supārśva)、8. チャンドラブラバ (Candraprabha)、9. プシュパダント (Puṣpadanta)、10. シータラ (Śītala)、

11. シュレーヤーンサ (Śreyāṃsa)、12. ヴァスプー ज्या (Vasupūjya)、13. ヴィマラ (Vimala)、14. アナンタ (Ananta)、15. ダルマナータ (Dharmanātha)、16. シャーンティナータ (Śāntinātha)、17. クントゥ (Kunthu)、18. アラナータ (Aranātha)、19. マッリ (Malli)、20. ムニ・スヴラタ (Muni Suvrata)、21. ナミナータ (Naminātha)、22. ネーミ、もしくはアリシュタネーミ (Nemi/Ariṣṭanemi)、23. パールシュヴァ (Pārśva)、24. マハーヴィーラ (Mahāvīra)

これら二十四祖師の行伝説話はほぼ型が決まっており、どれも前世、親族、身体的特徴、弟子、涅槃について記述してある。だが、この二十四人のうち、第一祖師のリシャバ、第二十二祖師のネーミ、第二十三祖師のパールシュヴァ、そして最後のマハーヴィーラは他の祖師に比べてより詳細な行跡が述べられることが多い。リシャバは主に『パウマチャリウ』などのラーマ伝記類の冒頭にその伝説が語られる。ネーミは『マハーバーラタ』と同時代の祖師とされ、『マハーバーラタ』のジャイナ教徒の翻案作品に登場する。マハーヴィーラの直前の祖師であるパールシュヴァはその行伝説話の数が多く、内容も詳細である。最後の祖師であるマハーヴィーラはジャイナ教の原始経典の頃からその行跡が伝えられている。

二十四祖師のうち、歴史的に実在したであろうと考えられているのは最後の二人であるパールシュヴァとマハーヴィーラのみである。

転輪聖王

転輪聖王 (Cakravartin) はバラタ・クシェートラ全土の統治者を指す。その行跡は祖師のものと同じように一定の型で示される。その型とは「前世の行いの結果、転輪聖王として生まれ、敵を打ち破り、バラタ・クシェートラ全土を制圧する。そして、長期間の統治の後、苦行者となり、解脱に至る」というものである。

十二人の転輪聖王の名を以下に挙げる。

1. バラタ (Bharata)、2. サガラ (Sagara)、3. マガヴァン (Maghavan)、4. サナトクマーラ (Sanatkumāra)、5. シャーンティナータ (Śāntinātha)、6. クントゥナータ (Kunthunātha)、7. アラハナータ (Ara(ha)nātha)、8. スバウマ (Subhauṃa)、9. パドマナーバ (Padmanābha)、10. ハリシェーナ (Hariṣeṇa)、11. ジャヤセーナ (Jayasena)、12. ブラフマダッタ (Brahmadatta)

転輪聖王の特徴として、十四の宝物 (ratna) と九つの財宝 (nidhi) を持つことが挙げられる。十四の宝物とは円盤 (cakra)、杖 (daṇḍa)、剣 (khadga)、王傘 (chatra)、盾 (carma)、宝玉 (maṇi)、貨幣 (kākiṇī)、将軍 (senāpati)、侍従 (gṛhapati)、王冠の宝石 (kākiṇī)¹、木工職人 (vārdhakī)、宮廷僧 (purohita)、象 (gaja)、馬 (aśva)、妻 (strī) であり、九

¹ Schubring. p.19.

つの財宝とは邸宅 (naisarpa)、パードウカ米 (pāṇḍuka)、装飾品 (piṅgalaka)、宝石 (sarvaratna)、宝 (mahāpadma)、占星術 (kāla)、鉞山 (mahākāla)、武技 (māṇavaka)、技芸 (śaṅkha) である。九つの財宝のいくつかはその具体的な様相が不明瞭である。²

バラデーヴァ

バラデーヴァ (Baladeva) は後に述べるヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァと組になっている。例えば、第八のバラデーヴァのラーマは同じく第八代のヴァースデーヴァであるラクシュマナ、プラティヴァースデーヴァのラーヴァナと同時代に生まれたとされている。

九人のバラデーヴァを以下に挙げる。

1. ヴィジャヤ (Vijaya)、2. アチャラ (Acala)、3. ダルマプラバ、もしくはバドラ (Dharmaprabha/Bhadra)、4. スプラバ (Suprabha)、5. スダルシャナ (Sudarśana)、6. アーナンダ (Ānanda)、7. ナンダナ (Nandana)、8. パドマ、もしくはラーマ (Padma/Rāma) 9. (バラ・)ラーマ ((Bala-)Rāma)

バラデーヴァの特徴は肌の色が白く、青い衣服を纏っていること、その旗印が椰子の木であること、そして四つの武具 (āyudha) を持っていることである。四つの武器は白衣派の伝承では弓 (dhanus)、棍棒 (gadā)、すりこぎ (musala)、鋤 (hala)、空衣派の伝承では弓の代わりに首飾り (ratnamālā) とされている。

バラデーヴァはヴァースデーヴァと共にプラティヴァースデーヴァと戦い、それを打倒する。その後、ヴァースデーヴァの死ぬと、苦行者となり、涅槃に達するというのがその行跡の型である。

ヴァースデーヴァ

ヴァースデーヴァ (Vāsudeva) はナーラーヤナ (Nārāyaṇa)、ヴィシュヌ (Viṣṇu) とも呼ばれ、全て対応するバラデーヴァの義理の弟である。バラデーヴァ、ヴァースデーヴァ、プラティヴァースデーヴァを扱った説話の中において最も英雄的な行動をとるのがヴァースデーヴァである。対立するプラティヴァースデーヴァを殺害するのもヴァースデーヴァである。

九人のヴァースデーヴァを以下に挙げる。

1. トリプリシュタ (Triprṣṭa)、2. ドヴィプリシュタ (Dviprṣṭa)、3. スバヤンブ (Svayambhu)、4. プルショッタマ (Puruṣottama)、5. プルシャシンハ (Puruṣasimha)、6. プンダリーカ (Punḍarīka)、7. ダッタ (Datta)、8. ラクシュマナ (Lakṣmaṇa)、9. クリシュナ (Kṛṣṇa)

特徴としては肌の色が黒く、黄色の衣服を纏っており、胸に巻き毛を持つ。そして、鷹を旗印とする。また、次の七つの武具を持っている。それは白衣派の伝承ではパンチャジャンヤの巻貝 (pañcajanya)、円盤

² 九つの財宝の解釈は Kulkarni, V. M., *Studies in Jain Literature* edited by J. B. Shah. Ahmedabad: Shreshti Kasturbhai Lalbhai Smarak Nidhi, 2001, p.7 に従った。

(sudarśana)、カウモーダキーの棍棒(kaumodakī)、角製の弓(śārṅga)、ナンダカの剣(nandaka)、花輪(vanamālā)、カウストゥバの宝石(kausutubha)である。この七つの武具はヒンドゥーの説話におけるクリシュナのものと同じである。空衣派の伝承では最初の二つが杖(daṇḍa)と槍(śakti)となる。

ヴァースデーヴァはプラティヴァースデーヴァを殺した後、半転輪聖王(ardhacakrin)となり、長い間、王国を治める。だが、その死後、戦争における殺生の罪によって地下に転生する、という型で語られる。

プラティヴァースデーヴァ

プラティヴァースデーヴァ(Prativāsudeva)は英雄ではあるが暴君として描かれる。バラタ・クシェートラの半分を統治する半転輪聖王であるが、バラデーヴァ、ヴァースデーヴァと敵対し、最終的には殺害される。その後、その悪行のために地下に至る。

九人のプラティヴァースデーヴァを以下に挙げる。

1. アシュヴァグリーヴァ(Aśvagrīva)、2. ターラカ(Tāraka)、3. メーラカ(Meraka)、4. マドゥカイトバ(Madhukaitabha)、5. ニシュンバ(Niśumbha)、6. バリン(Balin)、7. プラフラーダ(Prahlāda)、8. ラーヴァナ(Rāvaṇa)、9. ジャラーサンダ(Jarāsandha)

ジャイナにおける転輪聖王の描写

ジャイナ教の説話では転輪聖王に言及することが非常に多い。転輪聖王を主人公に据えた作品も数多くある。その描写も基本的な型は同一であるにしても多彩であり、多くの説話が挿入されている。その豊富さはヒンドゥー教や仏教に比べても格段に多い。本論文で取上げた『ハリセーナチャリウ』もその一つである。

内容要約

『ハリセーナチャリウ』は十番目の転輪聖王であるハリシェーナ(アパブランシャ語ではハリセーナ)が故郷を出て、放浪し、転輪聖王になり、涅槃に至るまでを描いた作品である。

全体は四つのサンディ(sandhi)からなっており、それぞれ十三、十二、二十一、十九のカダヴァカ(kaḍavaka)を持つ。サンディとカダヴァカについては「サンディバンダ」の項で詳しく述べる。詩節は基本的に二つの脚(pada)からなるが、カダヴァカの末尾には四脚からなるガッター韻が入る。詩節の総数は五百八十三である。

まず、第一サンディではカンピルヤブラに住む王子ハリセーナが放浪に至るまでを、第二サンディでは苦行者の庵で妻となるマダナーヴァリーと出会い、結婚するまでを、第三サンディではヴィドヤダラの娘にさらわれて、戦をし、転輪聖王となるまでを、第四サンディでは苦行者とな

って涅槃を得るまでをそれぞれ記している。

アパブランシャ語の『パウマチャリウ』(サンディ11、カダヴァカ1-2)、
プラークリット語の『パウマチャリヤ』(8.143-210)、サンスクリット語の『パ
ドマプラーナ』(8.272-401)にはハリセーナの行伝説話がより簡潔な形で
挿入されている。Tsuchida(1999)では『パウマチャリヤ』の記述を元にハ
リシェーナの行伝の内容について同種説話との比較可能性を検討して
いる。『パウマチャリウ』『パウマチャリヤ』の該当部分については9.参考
資料において日本語訳を付してある。

作者と成立年代

写本中には明らかに作者であると判断できるような名前は見られな
い。しかし、作者であろうと推測できるものとしては次の詩節がある。

3-21のガッターに「ハリセーナの行跡を読み、聞いた者たちの罪は滅
される。ジナの教説はジナの教説に心を定め、敬礼に値する身体を持
つ詩人ジーヤウに敬礼する」³

ただ、このジーヤウ(おそらく対応するサンスクリット語はJīva)という名
が他のジャイナ教徒の著作の中で作者として出てくることが無いので、
どのような人物かは今のところは判断できない。

成立年代も書写年代より以前ということしか分からない。

校訂情報

本校訂はインドで得られた次の二本の写本および校訂本一つを元に行
っている。

写本α

インドのジャイプルにあるジャイン・ヴィドヤー・サンスターン付
属、アパブランシャ・サーヒトヤ・アカデミー(Jain Vidyā Saṁsthān,
Apabhraṁś Sāhitya Akadēmī)に所蔵されていたものである。大きさは
おおよそ11.5cm×27cmであり、枚数は二十四枚、材質は紙である。
文字は比較的現在のものに近いナーガリー文字である。一行の文字
数は四十文字強、一枚の行数は八～九行であり、紙の表、裏共に書
き込まれている。

末尾にある記述によれば書写された日付はヴィクラマ暦1583年
アーシャーダ月白月10日土曜日、西暦に換算すると1526年6月19
日火曜日である。

写本β

ジャイプルにある空衣派のジャイナ教寺院で作られた組織シュ
リー・ディガンバル・ジャイン・マンディル・マハーサング(Śrī

³ "hariseṇaho cariu paḍhaṁtāhaṁ / pāvakkhau hoi suṇaṁtāhaṁ //
jīṇasāsaṇi bhāveṁ ikkamaṇu kavi jīyau navai sapaṇayataṇu //".

Digambar Jain Mandir Mahāsaṅgh) が所有していた。大きさはおおよそ26cm×11.5cmであり、枚数は十七枚、材質は紙である。文字は写本 α と概ね同じである。一行の文字数は五十文字前後、一枚の行数は十～十五行であり、紙の表、裏共に書き込まれている。

書写された日付はヴィクラマ暦1551年マールガシラ月黒月8日木曜日、西暦に換算すると1494年10月22日水曜日である。

校訂本S

2006年にSnehlata Jainによって発行された校訂本。原則として写本 β に従っており、写本 α はほとんど採用されていない。本稿では韻律の観点から α を採用している場合も多々あるため、校訂本Sの判断も示している。

本稿では詩節の脱落や誤記が少ない写本 β を底本とし、それを写本 α によって修正を加えた。

両写本は内容的にはさほど違いは無い。サンディやカダヴァク、詩節の数もほぼ一致するのでどちらも元々は単一の作品を基にしていると考えられる。しかし、詩節の位置や脱落、付加などは少なくない。また、文法的要素、特に格語尾の形態が著しく異なっている。ただ、写本 α の処格語尾eと写本 β の処格語尾iのように、格語尾の異同の対応はある程度一貫している。よって写本 α と写本 β のどちらか、もしくは両方に、規範的な文法の観点から修正が加えられていることが想定される。さらに韻律規則の上で句末の処理に異同がある。a語幹主対格語尾の -u を中心としていくつかの曲用語尾に関して、写本 α では -u を -oとすること、写本 β ではアヌスヴァーラを付加するといったケースがしばしば見られる。校訂本Sではそのどちらも採用していない。両者のうち特にアヌスヴァーラの付加は文法規則に反するが、本稿では写本 β を基本とすること、韻律の再現を重視することの二つの観点からアヌスヴァーラの付加を採用している。アヌスヴァーラが存在しない箇所も韻律上必要と思われる場合は適宜付加している。

韻律

インド語の古典で使用される韻律には多様なタイプが見られるが、時代によって主に使われる韻律は変化してきた。大まかな推移としては音節数を基礎とした韻律から音量を基礎とした韻律への変化があげられる。実際にどのような韻律が使用されてきたかを知る情報源として各種韻律書がある。。

・『ジャーナーシュライー』(*Jānāśrayī*) 6世紀。主にサンスクリットの韻律について記された文献であるがアーリヤー韻を扱う第五章において「世間で流行しているほかの韻律を以下述べる」とあり、19種の韻律が述べ

られている。サンスクリット語での定義であるが、その韻律名は『ヴリッタジャーティサムッチャヤ』とおおむね一致しており、プラークリット諸語独自の韻律の嚆矢と見なすことができる。

・『ヴリッタジャーティサムッチャヤ』(*Vṛttajāṭisamuccaya*) 7世紀。『ジャーナーシュライー』とは異なり、プラークリット語で書かれている。

・『スヴァヤンブーチャンダス』(*Svayambhūchandas*) 10世紀。
作者のスヴァヤンブー(*Svayambhū*) は『パウマチャリウ』や『リッタネーミチャリウ』などの大部のジャイナ教行伝説話を著した人物。全十三章中八章がプラークリット諸語の韻律、五章がアパブランシャ語の韻律の記述に当てられている。プラークリット諸語の韻律とアパブランシャ語の韻律を分けている。

・『チャンドーヌシャーサナ』(*Chando'nuśāsana*) 12世紀。
作者のヘーマチャンドラ(*Hemacandra*) は文法書『シャブダーヌシャーサナ』、詩論書『カーヴィヤーヌシャーサナ』などを著し、文学のための言語としてのアパブランシャ語を確立させたジャイナ教徒である。『チャンドーヌシャーサナ』もその一連の著作に含まれ、サンスクリット語やプラークリット語とともにアパブランシャ語の韻律についても言及されている。これより以前のプラークリット語の韻律書よりも整理が進み、より実内容的な内容となっている。

『カヴィダルパナ』(*Kavidarpaṇa*)、『チャンダハコーシャ』(*Chandaḥkośa*)、
『プラークリタパインガラ』(*Prākṛtapaiṅgala*)
13～14世紀。これらの諸文献はヘーマチャンドラよりも後代の作品であり、詩作のための作品という性質が強調されている。サンディやカダヴァカという文学作品の構成上の単位を定義しているところにもそれが現れている。

『ハリセーナチャリウ』のうち本稿校訂部分で用いられている韻律は冒頭部およびガッター部分を除くと、16マートルの2行詩、あるいは15マートルの2行詩の2種類である。韻律書にはどちらもそのままの形で適合する韻律名は得られない。そこで本稿では便宜的に、16マートルの2行詩をパーダークラカ(*Pādākulaka*)とし、15マートルのものは末尾のガナを記した。全体の校訂の後、改めて統一的に韻律を整理する必要がある。

サンディバンダ

アパブランシャ語のジャイナ行伝説話の主な形式は一般にサンディバンダ(*sandhibandha*)と呼ばれる。これは全体を内容上の区切りからサンディ(*sandhi*)に分け、それぞれのサンディを細かなカダヴァカ

(kadavaka)に分けるものである。各カダヴァカはおおむね10～20詩節からなり、その構造は起部に当たる1詩節、内容部にあたる部分、そして結部にあたるガッター(ghattā)である。内容部の韻律は原則として統一されており、それがカダヴァカを一つのまとまりとしている。それぞれ異なる韻律が採用される。起部と結部はそれぞれ二行詩から四行詩であり、内容部は可変であるが、おおむね10から20行からなる。上述の韻律書にもその説明が見られる。『チャンドーヌシャーサナ』においては以下の記述が見られる。

sandhyādaṁ kaḍavakānte ca dhruvaṁ syād iti dhruvā dhruvakaṁ ghattā vā // 6.1

「sandhiの冒頭部とkaḍavakaの結部はドゥルヴァ律、あるいはドゥルヴァー律、ドゥルヴァカ律、ガッター律が用いられる」

sā tredhā śatpadī catuṣpadī dvipadī // 6.2

「それらには6行詩、4行詩、2行詩の3種がある」

kaḍavakānte prārabdhārthopasaṁhāre ādye chaḍḍanikā ca // 6.3

「kaḍavakaの結部、次節の始まりを意味する結部にはチャッダニカ律を用いる」

『スヴァヤンブーチャンダ(Svayambhūchanda)』では使用される韻律を中心に述べている。

āhiṁ puṇu ghatta samāmaṇṁti / jamaāvasāṇa chaḍḍaṇi bhaṇṁti //
saṁkhāṇibaddhakaḍavehiṁ saṁdhi / iha vivihapaārahiṁ tuhuṁ vi baṁdhi //
8.16

「冒頭部にガッター律がくると考えられている。脚韻を持つものはチャッダニカ律と呼ばれる。数の決まったカダヴァカでさまざまなやりかたでサンディを作るように」

saṁdhihiṁ āhiṁ ghattā / duvai gāhādillā //
mattā paddhāḍiāe / chaḍḍaniā vi paḍillā // 20

「サンディの冒頭部にガッター律、ガーハー律、アディッラー律、マッター律、パッダディアー律、チャッダニアー律、パディッラー律」

校訂と翻訳

冒頭部

Hariseṇacariu

ハリセーナチャリウ

oṃ namo vītarāgāya //

オーム。離欲者に敬礼。

bhāveṃ paṇavivi muṇi-suvvayaho caraṇa-kamala bhava tāva-mahā /
nisuṇahu bhaviyahu vahu-rasa-bhariyahu hariseṇahu payaḍemi kahā // 1

*[Madirā] βにはこの句がない, Sも不採用.

心から聖者スヴラタの蓮の如き御足の跡を敬礼し、聞け。美しく多くの魅力
を有するハリシェーナの行跡を明らかにしよう。

jiṇa-sāsaṇeṃ duriya-paṇāsaṇeṃ / aho jaṇa kaṇṇu muhuttau dehu //
vimalujjalu tava-nimmalu / ihu hariseṇaho cariu suṇāhuṃ // 2 //

*[Madirā] 2a sāsaṇeṃ] α:sāsaṇi || paṇāsaṇeṃ] β:paṇāsaṇi. 2b kaṇṇu muhuttau]
α:kaṇṇamahō chau || dehu] α:dijjaho. 2c tava] βS:tau. 2d ihu] α:yau || suṇāhuṃ]
α:muṇijjaho S:suṇehu.

罪過を滅するジナの教説に、ああ、人々よ、直ちに耳を傾けよ。
この汚れなく行により清らかとなったハリシェーナの行跡を聞こうではな
いか。

saṃdhi-1

サンディ 1

1.1.

paṇaveppiṇu jiṇavaru kamala-jualu / sura-mauḍa-ṇihitṭha-caraṇa-juyalu // 1.1

*[15, 15, na-gaṇa] α:は 1bを欠く. 1a kamala-jualu] S:tavavimalu.

1b ṇihitṭhaはnidhisthaの意か。

蓮の如き両目を有し、神々の王冠を備えた(ジナの)両足に敬礼し

risi vaṃdivi uttama-joya-dharā / je asuha-kamma-ninnāsayarā // 2

*[Pādākulaka, sa-gaṇa] 2a vaṃdivi] α:vaṃdami S:viṃdivi || joya-dharā] α:jogadharu.
2b ninnāsayarā] α:ninnāsayaru.

不浄の行為を打ち消し、最高のヨーガを有する聖仙に私は敬礼する。

aṇubhāveṃ tāha duriya-dalaṇa / jai ciṃtami kā vi dhamma-savaṇa // 3

*[15, 15, na-gaṇa] 3a aṇubhāveṃ tāha] β:aṇubhoveṃ tāha S:aṇubhovaṃtāha || dalaṇa]
S:dalaṇā. 3b jai] βS:lai || dhamma] α: dhammeṇa.

私が説法に赴こうとすれば、とたんにその思いによって罪過は滅するだろう。

dhaṇa-vihau natthi kām̐ karami / jeṃ devi supattaha uttarami // 4

*[15, 15, na-gaṇa] 4a dhaṇa] β: thaṇu, kām̐] βS: kimp̐ vi. 4b jeṃ] β:jam̐ || supattaha] β:supattaho || uttarami] βS:uttarammi.

財産を打ちのめすこともなく私は何をすればいいのか。布施されるべき人物に布施して彼岸に渡ることを。

ciṃtaṃtu rattidiṇu jhīṇataṇu / tau karivi na sakkami dīṇamaṇu // 5

*[15, 15, na-gaṇa] 5a ciṃtaṃtu] α:vitaṃtu || rattidiṇu] α:ratiḍiṇu || jhīṇataṇu] α:jhīṇattaṇu. 5b karivi] α:karami || dīṇamaṇu] α:dīṇasaṇu.

滅すべき身体で昼夜思い悩みつつ、憂いを感じながらそのようなことをすることは私にはできない。

vihī āyahum̐ eku vi nāhi kiō / na viniyami na saṃjami doṇitthiō // 6

*[Pādākulaka] 6a vihī] βS:viḥu || āyahum̐] βS:eyahum̐ || eku] βS:vi ikku || kiū] β:kio. 6b viniyami] βS:vi dāni || doṇitthio] βS:ṇiya viṭṭhau.

これらの規則は一つも守られず、遵守も感官の制御も出来ていない。

appāṇau vaṃciū mūḍhaeṇa / jaṇadhaṇayaravāsā luddhaeṇa // 7

*[Pādākulaka, ja-gaṇa] 7b jaṇadhaṇayaravāsā] α:ghaṇaḡharavāsaho || luddhaeṇa] α:laddhaeṇa.

愚かさのため自己を欺き、欲望のため家族を養うために都市に住んでいる。/7

annu vi kai vāu samuvvahami / vuhayaṇi appāṇau uvahasami // 8

*[15, 15, na-gaṇa] 8a kai] α:kavi. 8b vuhayaṇi] βS:vuhayane || appāṇau] α:appāṇaum̐

私は他の詩人の言葉を集成した。智慧ある人々のなかでは私は自ら物笑いになったようなものだ。/8

na vijāṇai chaṃdu na vāyaraṇu / na vi geu na lakkhaṇu na vi karaṇu // 9

*[15, 15, na-gaṇa] 9a β:冒頭に vuhayaṇe || na vijāṇai] βS:navi yāṇami.

韻律学も文法学も歌学も比喻法も発音も知らず、/9

na vi sulaliya-vāṇi nāhi harisu / kai sīhahu jaṃvū samasarisu // 10

*[15, 15, na-gaṇa] 10a sulaliya] α:sulaliū || nāhi] βS:ṇa vi ya. 10b kai] α:kavi || sīhahu] βS:sīhaham̐

魅力的な言葉も喜びも知らない詩人は獅子というよりもジャッカルに似ている。/10

paraloya-kajji na vi kittimaṃ / paṇavami paramesaru parama-pau // 11

*[Pādākulaka, sa-gaṇa] 11a kajji na vi kittimaṃ] α:kajjena vi ko vi sao || kittimaṃ] βS:kittimau. 11b paṇavami] α:paṇayaho || pauṃ] α:pao S:pau.

来世につながるような名声などない私は最高処にいる主宰神に敬礼する。/11

pai jīṇavar-ṇāhu tuṇaṃtāhaṃ / pāvakkhau hoi suṇaṃtāhaṃ // 12

*[Pādākulaka, ma-gaṇa] 12a ṇāhu] αS:ṇāha || tuṇaṃtāhaṃ. 12b α:tayaham S:tuṇaṃtāha || pāvakkhau] α:pāvakkhao || suṇaṃtāhaṃ] α:tahahaṃ S:suṇaṃtāha.

ジナは讃える者たちのもとに現れ、教えを聞く者たちの罪悪は滅する。/12

rai mai sui suhu āroga-taṇu / aha suravai-bhavaṇi bhoyara-vaṇu // 13

*[15, 15, na-gaṇa] 13a mai] α:ai || sui] α || āroga-taṇu] βS:ārou dhaṇu. 13b suravai] α:suravara || bhavaṇi] α:bhavaṇe || bhoyara] α: bhoga.

快樂、思慮、清浄、幸福、無病の身体を有し、そしてインドラの住処で安楽を享受する。/13

paṇavaṃtaha pai tihuvaṇa-tilaṃ / pāvijjai siddhi-sukka-ṇilaṃ // 14

*[Pādākulaka, sa-gaṇa] 14a paṇavaṃtaha] α:paṇavaṃtahaṃ || pai] S:paim || tihuvaṇa] β:tihuyana || tilaṃ] α:tilao S:tilau. 14b ṇilaṃ] α:nilao βS:nilau.

敬礼する者たちには三界の装飾たる王が現れ、幸福が定められた住処が手に入る。/14

ghattā

vimalu-jalo saccha-sunimmale jo avagāhe vi tava-jala-ṇhāu /

jīṇa-calaṇahi muṇivara-vayaṇahi tahō saṃpattu tittha-phala-sāu // 15 //

*[Ghattā, ṇhは一子音] 15a vimalu-jalo] α:vimalujjale S:vimalujale || saccha] α:savva || avagāhe] α:avagāha || jala] α:jale. 15b calaṇahi] α:calaṇahiṃ S:calaṇihi || vayaṇahi] α:vayaṇahiṃ S:vayaṇihi || saṃpattu] α:sammatta || phala-sāu] α:phalavvai.

汚れなく清らかで大変素晴らしくまったく汚れのない苦行(に当たる:水で沐浴した者はジナの行跡と聖者の言葉において甘味な彼岸の果報を得た。/15

1.2.

raṇi dhanau jīṇivi dahavayaṇa-pahu / pupphavai vimāṇi ārūḍha lahu // 1

[15, 15, na-gaṇa] 1a raṇi] βS:raṇe || jīṇivi] α: jīṇavi || pahu] α: ehu. 1b pupphavi] α: puṣpaya || vimāṇi] α: vitāṇi || ārūḍha] S:ārūḍhu.

戦闘でダナダ(クベール)に勝利したラーヴァナ王は急いでプシュパカに乗った。/1

kaṃcaṇa-maṇi-rayaṇa-phuraṃṭiyahe / laṃkahe savaḍaṃmuhum jaṃtu ṇahe // 2
[Pādākulaka, sa-gaṇa] 2a phuraṃṭiyahe] α:phuraṃpaheβ:phuroṃṭiyahe. 2b laṃkahe]
S:laṃkahi || savaḍaṃmuhum] S:savaḍaṃmuhu.

金や宝玉や宝石で飾られたランカーの前で彼は空中で/2

pekkhai giri-sihara-samujjalaiṃ / dhava-labbha-kuṃda-sasi-nimmalaiṃ // 3
[Pādākulaka, sa-gaṇa] 3a sihara] βS: sihari || samujjalaiṃ] α:samujjalāiṃ. 3b labbha]
α:luvva S:lajja || kuṃda] βS:kumbha || nimmalaiṃ] α:nimmalāi. cf. [PC 31,5.2] sasi-
saṅkha- kunda- hima- duddha- dhavalu / harahāra- haṃsa- sarayabbha- vimalu.

白い雲やジャスミンや月のように濁りなく光り輝く山頂を見た。/3

taṃ niyavi pavollai dahavayaṇu / viṃbhau vahaṃtu vihasiya-vayaṇu // 4
[15, 15, na-gaṇa] 4a pavollai] βS: pavulliu. 4b vahaṃtu] βS:jaṇaṃtu.

それを見て驚かせるほど大きな声でラーヴァナは言った。/4

iya u kāi tāya accabbhuyaiṃ / giri-siharihi kusumaiṃ saṃbhuyaiṃ // 5
[Pādākulaka, sa-gaṇa] 5a iya u] S:iu || accabbhuyaiṃ] α:accambhuiṇu β:accubbhuyaiṃ
S:accubhuyaiṃ.

「お祖父様、山頂に生えているあのすばらしい花は何なのですか/5

to bhaṇai piyāmahu tuṭṭha-maṇu / iu ṇavahi vaccha tuhu paṇayataṇu // 6
[15, 15, na-gaṇa] 6a to] α || piyāmahu] α:piyāmuhum. 6b ṇavahi] α:nāhi || vaccha] α:
vattha.

そこでスマーリンは満足して言った。「ラーヴァナよ、それに頭を下げて
敬礼せよ。/6

ṇa vi āyaiṃ kusumaiṃ saṃbhuyaiṃ / jīṇa-bhavaṇaiṃ dhavalubbhuddhuyaiṃ // 7
[Pādākulaka, sa-gaṇa] 7a āyaiṃ] βS:āyai || kusumaiṃ] βS:kusumai || saṃbhuyaiṃ]
α:sambhaaiṃ S:sambhuyai. 7b jīṇabhavaṇaiṃ] α:jīṇabhavaṇai || dhavalubbhuddhuyaiṃ]
α: dhavaluddha adhayai S:dhavaluddha adhuyai.

あれは花が咲いているのではない。白く輝きながら上方に浮くジナの寺
院なのだ。/7

ghattā

giri-vivarihiṃ pavvaya-siharihiṃ jagi sakiyatthe hariseṇeṇa /
suha-desihiṃ rāma-paesihī kiya mahi bhavaṇa niraṃtareṇa // 8 //

[31, 29, ta-gaṇa] 8a vivarihiṃ] β:pavarihiṃ S:vivarihiṃ || sakiyatthe] α:sakisaccha ||
hariseṇeṇa] α:hariseṇaṇa. 8b suha] α:saha || rāma] α: rammaya || paesihī] S:paesihim ||
niraṃtareṇa] α: niraṃtara teṇa.

現世において目的を果たしたハリシェーナは幸福と喜びに満ちた諸州
において洞穴や山の頂に間断なく寺院を作り続けた。/8

1.3.

aliula-gaṇa-kajjalu kisaṇa-taṇu / puṇu bhaṇai dasāṇaṇu tuṭṭhamaṇu // 1

[15, 15, na-gaṇa] 1a kajjalu] α:kajjala || kisaṇa] α:kasaṇa β:kisaṇam. 1b dasāṇaṇa] β:dasāsaṇu || maṇu] β:maṇui.

蜂の群れや煤のように黒い身体をしたラーヴァナは満足して言った。/1

ko puṇu ehau sakiyatthu ṇaru / vitthariu jāsu jagi jasu pavanu // 2

[15, 15, na-gaṇa] 2a sakiyatthu] β:kiyatthū S:sakiyattha. 2b jage] β:jagi.

現世において最高の名声を広げたその目的を達したお方とはいったい何者なのか/2

kiya bhavaṇa niraṃtara jeṇa mahi / tahu taṇiyakitti mahu tāya kahi // 3

[15, 15, na-gaṇa] 3a niraṃtara] S:niraṃtaru || mahi] α:mahiṃ. 3b kahi] α:kahiṃ

この大地に間断なく寺院を造られたお方の大いなる名声を祖父御どの、語ってください/3

to bhaṇai sumāli rahasa-bhariuṃ / suṇi dahamuha hariseṇaho cariuṃ // 4

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 4a rahasa] α:rahasu β:tahasa || bhariuṃ] α:bhario S:bhariu. 4b dahamuha] α:dhamuhuṃ || cariuṃ] α:cario βS:cariu.

そこでスマーリンは熱を込めて言った。「ラーヴァナよ、ハリシェーナの行伝を聞きなさい」/4

paṇavevi siddha puṇu kahami kahaṃ / kaṃpilla-nayari vahujaṇa-vasahaṃ // 5

[15, 15, na-gaṇa] 5a kampilla] α:kampella || kahaṃ] αS:kahavahujaṇavasahu] α:vahujāṇasahaṃ || vasahaṃ] αβS:vasaha.

成就者に敬礼してその話を語ろう。「多くの人に住むカンピルヤの町には/5

kaṃcaṇa-maṇi-rayana-visāla-sirī / riddheṇa visesai dhaṇaya-purī // 6

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 6b riddheṇa visesai] βS:riddhie savisesai.

黄金宝珠宝首饰からなる莫大な財宝を持ち、その富のゆえに物惜しみしない町として知られていた。/6

ṇiu nāmi visaddhau parivasaiṃ / riu-seṇu payāvaho jasu lhasaiṃ // 7

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 7a ṇiu] α:jiu || nāmi] α:titthu || visaddhau] α:visuddhau || parivasaiṃ] S:parivasai. 7b seṇu] βS:sinnu || jasu] α:jamu || lhasaiṃ] S:lhasai.

ヴィシュラブダ(?)という名前の王が居をかまえ、その威光に敵の軍勢も逃げ隠れる。/7

ahimāṇi dāṇi vikkami ajaṃ / paradāra-parammuha saccaraṃ // 8

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 8a ahimāṇi dāṇi] α:ahidoṇimaṇi || ajaum] α:ajao S:-a jau. 8b parammuha] α:paramuhum || raum] α:rao S:rau.

自尊の念強く、寛大で勇敢であり、他人の妻に対して誠実であることを喜ぶ。/8

tahō vappa mahāivi guṇa-pavarā / amteura-uttima-rūvadharā // 9

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 9a || mahāivi] α:mahāṇavi. 9b uttima] β:uttami.

彼にはヴァプラーという徳があり、後宮でも最上の美しさを有する王妃がいた。/9

tahē taṇaiu ari-jayasiri-ṇilaum / uppaṇṇu puttu jaga-kula-tilaum // 10

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 10a tahe] tahē || taṇaiu ari] α:taṇaim uvari || ṇilaum] α:ṇilao S:nilau. 10b jaga] α:jage || tilau] α:tilao S:tilau.

その彼女に敵への勝利をもたらす女神の住処たる息子、この世における一族の誉れたる息子が生まれた。/10

ghattā

jeṃ jammeṇa pavahaṃteṇa vairigharaha uppāyau tāsu /

suhi vihasiya vaṃdhava harisiya teṃ hariseṇu nāu kiu tāsu // 11 //

[Ṣaṭpadī] 11a jammeṇa] α:jammateṇa β:jammeṃteṇa. 11b vihasiya] β:viyasiya || teṃ] α:tam || kiu tāsu] α:kiyao.

誕生し活動したとたん敵の住処には恐怖が生まれ、友人は花開くように喜び、一族は歡喜する。それゆえ彼にはハリシェーナという名がつけられた。/11

1.4.

hariseṇu kumāru kālu gamaim / sahu vayasa juvāṇahi sahu ramaim // 1

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 1a gamaim] αβS:gamai. 1b vayasa] α:vayasā || juvāṇahi] α:uvāṇahim sahu] α:sahum || ramaim] S:ramai.

時が過ぎハリシェーナ王子は年齢を重ねて若者たちと遊ぶようになった。/1

kīlai vara muravihi pekkhaṇehi / gaṃdhavva geya uddikkhaṇehi // 2

[Pādākulaka, ja-gaṇa] 2a kīlai] α:kīrai || muravihi] α:suravahim || pekkhaṇehi] α:pekkhaṇehim. 2b geya uddikkhaṇehi] α: geya udekkhaṇehim S: geyau dikkhaṇehi.

すばらしいムリダンの演奏を見物し、ガンダルヴァの歌謡を見物して楽しみ、/2

āraṃbha parakkama ṇaṭṭhaehi / ucchitta calaṇa saṃghāḍaehi // 3

[Pādākulaka, ja-gaṇa] 3a parakkama] α:parikkama || ṇaṭṭhaehi] α:ṇaṭṭhaehim βS:ṇāḍaehi. 3b ucchitta] α:ukkhitta || saṃghāḍaehi] α:samghāḍaehim

激しく勇ましい舞踏と高く掲げた両脚と/3

maddala maumḍa chaṇṇāṇiehi / dāvai payoga paḍihāṇiehi // 4

[Pādākulaka, ja-gaṇa] 4a maddala] α:mamḍala || maumḍa chaṇṇāṇiehi] α:mauddha
chattāṇiehiṃ S:mau dacchaṇṇāṇiehi 4b payoga] β:panuga || paḍihāṇiehi]
α:paḍhahāṇiehiṃ.

マルダラやムクンダに包まれた一団や演劇の才能のある一団に(技量を)披露させ/4

ālāvaṇi tisara-vīṇa muṇaiṃ / taṃ millivi kaṇaya-daṃḍa guṇaiṃ // 5

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 5a tisara] α:tisariya || muṇaiṃ] α:kuṇaiṃ S:muṇai. 5b taṃ] α:ta ||
millivi] α:melavi || guṇaiṃ] S:guṇai

話も上手く、ティサラ(トリシラス? vid. De Clerq p.1703)のヴィーナーにも通じており、それを手に入れると黄金の撥の長さを測る。/5

asi-musala-musaṃdhi-sutti varaiṃ / nahi bhāmivi jhiṃdullau dharaiṃ // 6

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 6a musala] α:musalu || musaṃdhi] α:samūḍhi || sutti] α:satti ||
varaiṃ] α:bharaiṃ S:varai. 6b bhāmivi] α:bhāvaidi || jhiṃdullau] α:uddhaviṃai ||
dharaiṃ] S:dharai.

剣や杵や鎚矛や貝殻を選び取り、空を徘徊して(それらの武具を)毬のように持ち/6

jāṇai parahattha dacchaggamaṇu / ṇaha-laṃghaṇu vijja-ravetta-karaṇu // 7

[Pādākulaka, na-gaṇa] 7a dacchaggamaṇu] β:dacchaggamaṇu. 7b ṇaha] α:ṇahi || ravetta]
α:rivattu.

パラハッタを自在に操って進むこと、空に侵入すること、超能力で叫び声をあげる力となるような/7

gāruḍa-nimittu sā muddu tahā / suya-rāya sattha saṃvaṃdha kahā // 8

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 8a gāruḍa] βS:gāruḍū || sā muddu] α:sā mudu S:sāmuddu || tahā]
α:tiha. 8b suya-rāya] α:jāraiya || kahā] α:kahaṃ.

ガルーダの印契、そして王家に伝わる伝説に関する物語を熟知していた。/8

dappabbhaḍa vara turaṃga damaiṃ / kīlīkīlu jalajaṃtahaṃ ramaiṃ // 9

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 9a dappabbhaḍa] β:dappudhura S:dappu dhuravara || damaiṃ]
S:damai. 9b kīlīkīlu] α:kīlīkīla (kilakīla?) || jalajaṃtahaṃ] βS: jalu-jamti || ramaiṃ]
S:ramai.

勇敢な戦士である彼は馬を操り、噴水での遊びを楽しんでいた。/9

ghattā

vara-bhavaṇihi maṇi-rayāṇihi kuṃḍala-mauḍa-soha-siya-sāru /
nara-viṃḍahi matta-gayaṃdahim ramai bhoya hariseṇu kumāru // 10 //

[Udgīti] 10a bhavaṇihi] α:bhuvanahi || rayāṇihi] α: rayāṇihim || soha-siya] α: sohammi.
10b gayaṃdahim] α: gaiṃdahim || bhoya] α: bhoga || hariseṇa] α: haraseṇa.

宝玉に満ちたすばらしい宮殿において、耳飾りと冠をつけて威光と富が卓越している。ハリセーナ王子は多くの人々や発情した象たちとともに楽しんでいた。

1.5.

itthaṃtari punna-pavāhiyahum / paḍivaṇṇa diyaha aṭṭhāhiyahum // 1

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 1a itthaṃtari] α: etthaṃttari || pavāhiyahum] α: evāhiyahum
βS:pavahiyahu mc. 1b diyaha] α: divasa || aṭṭhāhiyahum] βS:aṭṭhāhiyahu.

そのような中、福德をもたらす八日祭の日程が承認された。/1

to vappāe va pahitṭha-maṇe / āesu dei niya-bhiccajaṇe // 2

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 2a va] α: vi || pahitṭha] α: pasamṇa. 2b bhiccajaṇe] α: bhiccuyaṇe.
そこでヴァプラーは喜ぶ家来たちに命じた。/2

saṃjuttahu jīṇavara-rahū turium / maṇi-kaṃcaṇa-rayāṇahim vipphurium // 3

[Pādākulaka, sa-gaṇa] 3a saṃjuttahu] α: saṃjottahu || turium] α: turio S:turiu. 3b
rayāṇahim] α: rayāṇasu || vipphurium] α: vitthario S:vipphuriu.

「宝玉と黄金と宝石で光り輝くジナの素早い戦車を軛から(放し)、

sovaṇṇa daṃḍa dhaya-dhuya-dhavalu / vara kiṃkiṇi-ghaṃṭāraṇa-muhalu // 4

[15, 15, na-gaṇa] sovaṇṇa] 4a α: sovaṇṇa || dhaya-dhua] α: dhua-dhaya || dhavalu] β: valu.
4b ghaṃṭāraṇa] α: ghaṃṭa-samudda.

黄金の杖とはためく白い旗を備え、小さな鈴や鈴の音の鳴り響く(その戦車を)走らせなさい。/4

jīṇa-paḍima susohiū vimalu pahu / jeṃ nayaraho majjheṃ bhamai rahu // 5

[15,15, na-gaṇa] 5a susohiū] α: sasohiū || vimalu] S:vimala || pahu] α: ehū. 5b jeṃ] α: jo ||
nayaraho] α: nayaṛihi || majjheṃ] α: majjhi S:majjhe || bhamai] α: bhamei || rahu] α: ehū

ジナのように光り輝く戦車が町の中で塵一つない道を走り回るのと同じように。/5

ghattā

paya-siya-vahu-caṃḍaṇa-rasiṇa lahu lahu vara-bhavaṇihi soha karehu /
paisaṃtaho jīṇavara-ṇāhahō aggai kaṃcaṇa-kalasa vavehu // 6 //

[30, 30, ja-gaṇa] 6a paya-siya-vahu] α: ehū siṃcahu || rasiṇa lahu] α: salilaṇa ||
bhavaṇihi] α: bhuvanahi. 6b paisaṃtaho] α: paisatahu || jīṇavara] α: tihuvaṇa || aggai]
α: aṇae || kaṃcaṇa] α: kaṃṭaṇa || kalasa vavehu] α: kala ruddhavehu S:kalasagehu.

所有する光り輝く大量の栴檀の光ですぐにジナの住居を飾りなさい。入ってくるジナの面前に黄金の壺を捧げよ。

参考資料

『パウマチャリウ』
第十一サンディ冒頭部

蓮型のヴィマーナに乗りながら、ラーヴァナはハリセーナによって建てられた巨大で美しいジャイナ寺院を見た。それはあたかも水の無い雲の塊のようであった。

11-1

そこでトーヤダヴァーハナの一族の灯火たるラーヴァナはスマーリンに尋ねた。

「ああ、親愛なる祖父よ、あれは月のように美しく水中に咲いた蓮でしょうか。

雪山が崩れてバラバラになったのでしょうか。星星が定位置から落ちてきたのでしょうか。

茎を伴った蓮を子供の上に載せたのでしょうか。

雲が雨を降らず誇りを砕かれて地に落ちたのでしょうか。

そこには千もの幸福が愛情と結びついた黒ハンサ鳥が住んでいるのでしょうか。

そこに誰かが自分の名声を壊して何百にもして落としたのでしょうか。

愛しい人の美しい顔を前にして下を向いてしまう百の月が集められたのでしょうか」。

ガッター

スマーリンはラーヴァナに言った。「あれらは石膏で塗り固めてあり、人々の目を喜ばせるハリセーナのジャイナ寺院である」。

11-2

ハリセーナは八日間のうちに、九つの宝物と十四の宝玉で大地を治めた。

初日はマハーラタのために生じた母の苦しみを知ってそこに行った。

二日目は苦行者の住む森に行き、そこでマダナーヴァリーの別離の苦しみを受け止めた。

三日目はシンドウの町で喜びに溢れた象を従え、宝玉のような少女を得た。

四日目はヴェーガマティーに誘拐され、ジャヤチャンドラーに引き渡さ

れた。

五日目にはガンガーダラ王との争いにおいて宝玉で飾られたチャクラを手に入れた。

六日目には全地上の王となり、マダナーヴァリーを得た。

七日目には彼は母の元へ赴き、勝ち鬨を上げた。

八日目には彼は礼拝の旅に出た。

『パウマチャリヤ』

第八節 - ラーヴァナの入城 (Dahamuhapuripaveso)

詩節143 ~ 210

バラタの地にカンピルヤプラ (Kampillapura) という名の美しい町がある。そこに多くの家来に尊崇されているシンハドゥヴァジャ (Sīhaddhaa) という王がいた。143

彼には美しく徳のあるヴァプラー (Vappā) という王妃がいた。彼女には清らかな顔立ちのハリセーナ (Hariseṇa) という王子がいた。144

ある時、敬虔なヴァプラーはその町のジャイナ寺院で宝玉でできたジナのための戦車を作らせた。145

彼にはもう一人、ラクシュミー (Lacchī) という美しい妻がいた。彼女の心は邪な考えに惑わされており、ジナの教えに従おうとしなかった。146

「八日祭 (aṭṭhāhiya)⁴は大変偉大なものなので、まず市中をブラフマーの戦車が走り、それからその後ろにジナの戦車が走るようにしましょう」と彼女は行った。147

その言葉を聞いて、ヴァプラーはヴァジュラで頭を打たれたかのように、苦しみと大変な憂いに苛まれ、148

こう誓った。「もし善い人たちに囲まれてジナの戦車が真っ先に市中を走り回るようにできたならば、私は彼らをもてなしましょう。そうでなければ、私は断食をします」。149

蓮の葉のような目を持つ彼女が泣いているのを見て、心を乱したハリセーナは尋ねた。「母上、あなたはなぜ苦しんで泣いているのですか」。150

母はジナの戦車等々が走り回ることにについて彼に話した。それを聞いて、憂いのために大変な苦しみに陥った彼は、151

父母が世界の中で最も大事であると言われたことを思い始めた。「世間に不評となるこのような少しの苦しみも私は彼らに味わわせることはできない。152

膨大な悲しみと憂いで苦しんでいる母を見ると何もすることができない。それなら自分の家を捨て、人のいない森へ入ろう」。153

⁴ ナンディーシュヴァラの地の52のジャイナ寺院にあるジナの像を規定どおりに礼拝するもの。来世での昇天が与えられるとされた。(*Jain Purāṇ Koś*, p. 42.)

そこで、彼は人々が寝静まった夜に町から出て行った。立派な木が生い茂り密林の獣が多く住む巨大な森へと入っていった。154

そこをうろついていると、苦行者たちがハリセーナに目を留めた。座を与えられ、果実や根の食事をとった。155

その頃、チャンパーブリーにジャナメージャヤ (Janamejaa) という名声が四方に広がる王がいた。彼はカーラ (Kāla) という王によって自軍と共に包囲されていた。156

力に満ちているジャナメージャヤ王も城から出て、カーラの正面に出て戦い始めた。157

戦闘が行われている時、用意されていた抜け道を通して、妻のナーガマティー (Nāgavai) は娘と共に森へと出て行った。158

そして、ナーガマティーは最初にその苦行者の庵にたどり着いた。彼女は娘と共にそこに滞在し、時を過ごした。159

ハリセーナを見て、美しさ若さにあふれたその少女は花を武器とする者 (カーマ神) の矢に撃たれ、見ているだけでは満足しなくなった。160 王女は母にこう言われていた。「前に言った言葉を思い出しなさい。『娘よ、容姿の優れたお前はチャクラドラ [= 転輪聖王] の妻となるでしょう』」。161

またハリセーナも彼女を見て身体を愛の矢に貫かれ、「この美しい方はいつ私の妻となるだろう」と考えた。162

苦行者たちは愛情の虜となった少女を見て、ハリセーナ王子を庵から出て行かせた。163

ハリセーナもその少女が美しく若々しく徳もあるのを見て、昼夜問わず想い続け眠れなかった。164

彼女との別離のために、座でも寝床でも、村にいても美しい町にいても、素晴らしく魅力的な庭園にいても、鬱々としていた。165

ハリセーナはこのように考えていた。「もしあの少女を得られるならば、バラタ全土の喜びを享受できるだろう。そのことに疑いは無い。166

その際には村にも町にも川岸にも山の頂にもジャイナ寺院をすぐに建てさせよう。167

その少女に心を奪われた彼は様々な村や家からなる美しい土地を放浪し、シンドゥナダ (Sindhunada) という町にたどり着いた。168

その時、表に出ていた町の娘たちが庭園でまじまじとハリセーナ王子を見ていた。169

その時、怒り狂った象がその美女たちに向かって駆けてきた。体液が零れ落ち、ふらふらと動き回って騒ぎを起こしていた。170

狂った巨大な象がグルグルと呻きながら来るのを見て、恐怖で動揺し混乱した娘たちは逃げ出した。171

象を恐れて泣き出した娘たちを見て、思いやりの心を持つ高貴なハリセーナはその地殻へと寄っていった。172

興奮した象のことを聞いて、町の人々も急いで野次馬のために駆けつけて来た。王も宮殿の上から見ていた。173

そこで彼は象に話しかけた。「どうしてこの娘たちにたいしてお前は攻撃するのか。私の前に来い。遅れるな」。174

すると恐ろしい姿の象は娘たちを打ち捨て、嬉々として彼の前に走り寄った。175

しっかりと腰帯を締めたハリセーナは稲光のようにその牙に足を置き、ハンサ鳥のように軽やかに飛び乗った。176

手引書に示されているような心と目を用いた様々な慰撫の術を使い、また上手に足で蹴り、手で叩くことによって、177

象の力への自惚れを霧散させた。よろめいて歩みが衰えた象を、あたかも蛇の毒を消すかのように屈服させた。178

耳をつかんで(=後悔させて)、その巨象に乗り、「このようなことは二度とするな」という理が通った命令をした。179

その後、町に入り、そこで何百人もの男女たちに見られつつ、カーマ神のような見目姿の彼は王の宮殿に到着した。180

宮殿の上に立っていた王は象に乗っている彼を見て、「彼は疑いなく勇士の誰かである」と考えた。181

そこで、財貨に飛んだ王は喜んで彼の王女百人を与えて、彼の結婚式を行った。182

まるで天界の神々のような特別の幸福を彼女たちと共に享受していたハリセーナだが、そこに住んでいても、マダナーヴァリー(Mayaṇāvālī)のことをまだ覚えていた。183

ある時、夜中に大きな寝台でぐっすり寝ているとヴェーガヴァティー(Vegavāī)というヴィドゥヤーダラの娘に攫われてしまった。184

眠りから覚めると、彼はその娘を見た。彼は力強い拳で掴まれて、吊られていたので尋ねた。「なぜ私を攫うのか」。185

彼女は言った。「勇士よ、聞いてください。スールヨーダヤ(Sūrodaya)という町があります。そこにはインドラダヌ(Indadhānu)というヴィドゥヤーダラの王が住んでいます。186

彼にはシュリーカーンター(Sirikantā)という妻がいます。彼女の腹からジャヤチャンドラー(Jayacandā)という娘が生まれました。主人よ、人間を憎んでいる彼女は自分の父を軽蔑しています。187

絵に描かれているバラタ全土の王たちを私は彼女に見せたのですが、一人として気に入るものがなかったのです。188

そこであなたの絵を描いて彼女に見せると、彼女はカーマ神の矢に身体を貫かれ、急に気に入りました。189

そして『もし彼とだけの欲求充足を享受できないなら、私は火の中に身を投げて死んでしまうわ。他の男はだめです』と言いました。190

主人よ、私は彼女の面前でうず高く積みあがる難行を考え出したのです。『もし私がすぐに彼を連れて来られなければ、私が火の中に入りま

す』と。191

主人よ、今、私はあなたの恩恵によって命を保つことができます。そしてまた遮るものの無い自分の智慧をすぐに完成させることができます」。

192

王子はスールヨーダヤの町へ連れて行かれて王と面会し、その娘と挙式を上げた。193

智慧で満ちたヴェーガヴァティーも素晴らしい贈り物を与えられて敬われた。高い尊敬を受けた彼女は世間にその声望が知れ渡った。194

彼女の結婚のことを聞いて、彼女の義理の兄弟であるヴィドゥヤーダラのガンガーダラ (Gaṅgāhara) とマヒーダラ (Mahihara) の二人は大変立腹した。195

彼らは勇士たちと共に騎馬や象に旗印をくくりつけ、戦をするためにスールヨーダヤの町まで来た。196

ハリセーナは勇士たちからなる強力な軍が来ていることを聞いて、立ち向かうためにヴィドゥヤーダラたちを連れて急いで出て行った。197

沢山の武器が投入され、陣楽音が鳴り響き、騎馬も象も倒れ伏し、身体が踊っているように見えるほどの戦いだった。198

敵方には象も戦士も騎馬もいなくなったが、ハリセーナはどんな鋭い矢にも貫かれることはなかった。199

戦闘中に恐怖によって動揺し混乱した自軍を見て、ガンガーダラとマヒーダラは二人とも逃げ去ってしまった。200

至上の福德を得、十四の宝を持ち、バラタ全土の主となり十番目の転輪聖王となったハリセーナの名はあまねく知れ渡った。201

国土全てを享受しても件の娘に愛着を持ち続けた彼にはマダナーヴァリーが居なくては三界も虚しいものに思えた。202

ハリセーナは軍勢を引き連れて苦行者たちの庵に行った。手を蓮や花で満たした森の住人たちが彼を目撃した。203

畏怖に慄いたジャナメージャヤは彼に最高の娘を与えた。ナーガマティーも彼女の素晴らしい結婚を法の上から認めた。204

彼はマダナーヴァリーを連れ、三万二千人の王に囲まれて、何百もの祝福の歌に讃えられながらカンピルヤブラに到着した。205

そこで自分の母に会い、彼女の足に敬礼した。ヴァプラーは息子を見ると自分の身体を支えられないほどになった。206

ハリセーナは太陽のような機体を持ち、宝で飾られたジナの戦車を沢山作らせた。ヴァプラーはそれを走り回らせた。207

出家者たちや在家者たちにも素晴らしい財物が振舞われ、法に励む人や賢い人はジナの教えを受け入れた。208

彼はこの地上にある村、町、都市、川の合流点、山の頂に高々とした清浄なるジャイナ寺院を建てさせた。209

長い間、王国を治めて、性の歓楽を享受した後、ジナの儀式を受け入れて [= 出家して]、悪業から離れ、シヴァの幸福 [解脱] を得た。210

ガッター

月、貝、牛乳、そして蓮のように美しいこれらの寺院は彼によって建てられたのだ。

まるで大地の装飾であり、また永遠にして不動のシヴァの幸福であるようなそれは。

参考文献

De Clerck, Eva. *Een Kritische studie van Svayambhūdeva's Paūmacariu*, Proefschrift ingediend voor het behalen van de graad van doctor in de Oosterse talen en culturen. Gent: Universiteit Gent, Faculteit Letteren en Wijsbegeerte. Vakgroep Talen en culturen van Zuid-en Oost-Azië. (2005)

Jacobi, Hermann. "On Indian Metrics". *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* vol. 5 pp. 147-153. (1889)

_____. *Bhavisatta Kaha von Dhaṇavāla: eine Jaina Legende in Apabhraṃśa*. (1918)

_____. *Sanatkumāracaritam, ein Abschnitt aus Haribhadras Nemināthacaritam*. (1921)

_____. *Paumacariyaṃ*, Ahmedabad: revised second edition by Punyavijaya. (1962-68)

Jain, Pannalal. *Padma Purāṇa*. (2000)

Jain, Snehlata. *Hariseṇacariu*. (2006)

Mayrhofer, Manfred. "Yati and Gaṇa in Apabhraṃśa verse". *Indo-Iranian Journal*. vol. 31. number 1. pp.17-25. (1988)

Schubring, Walther. *Die Lehre der Jainas*. (1935)

Tsuchida, Ryutaro. *The story on king Hariṣeṇa related in a Jaina Rāmāyaṇa*. (1999)

Velankar, Hari Damodar. "Gāthālakṣaṇa of Nanditāḍhya". *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* vol. 14 pp. 1-38. (1932)

_____. "Vṛttajāṭisamuccaya of Virahāṅka". *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society (New Series)* vol. 8 pp. 1-28. (1932)

_____. "Prākṛta and Apabhraṃśa Metres". *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society* vol. 23 pp. 1-12. (1947)

_____. *Jayadāman* (1949)

_____. *Chando'nuśāsana* (1961)

____. *Kavidarpaṇa*. (1962)

____. *Svayambhūchanda*. (1962)

Weber, Albrecht. *Indische Studien: Beiträge für die Kunde des indischen Alterthums im Vereine mit mehreren Gelehrten* Vol. 8. (1863)